

太平洋戦争中、現在の中学生くらいの年齢で戦地に赴いた少年たちがいる。旧日本海軍が中堅幹部養成を目的に創設した「特別年少兵（特年兵）」たちだ。弥彦村で飲食店

旧日本海軍「特別年少兵」

を営む板垣裕さん(56)は、特年兵に志願し、終戦後、古里の三条市に帰ってきた伯父の羽生勝美さん(1927〜2013年)が所有していた軍支給品を保管している。戦局の悪化で命を散らす特年兵も多かった。板垣さんは「年端もいかない若者が戦争に参加した事実を、世に残していきたい」と話している。
(三条総局・猪俣慶幸)

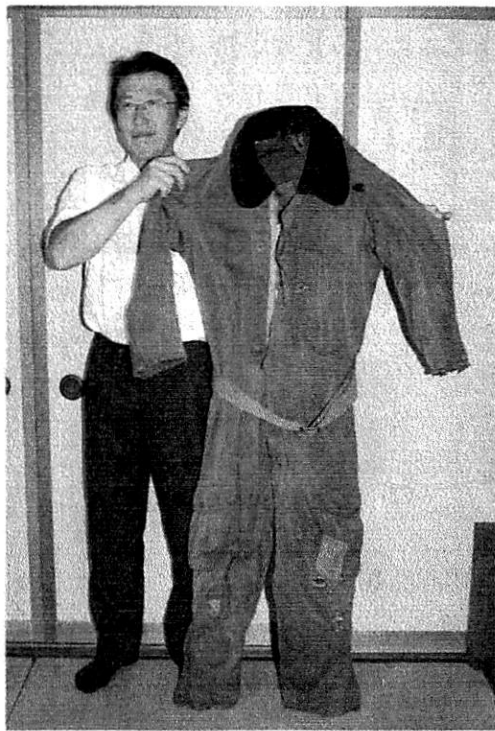
支給品は軍務の時に着用していたと思われるつなぎの作業服と、双眼鏡の二つだ。羽生さんの遺族の意向で板垣さんの手元にある。

羽生さんは太平洋戦争開戦翌年の1942年、14歳の時に、特年兵の第1期生として舞鶴海兵団に入団。1年ほどの教育期間を終えると、2等整備兵曹になり、軍務に就いた。サイパン沖では敵艦の撃沈も経験。終戦を迎え、45年9月に古里に戻った。その後は三条市で電器店を営んだ。

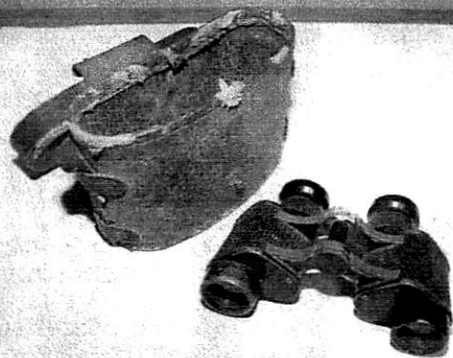
「寡黙で真面目な兄でした」と振り返るのは、板垣さんの母で、羽生さんの妹の好江さん(79)。羽生さんは6人きょうだいの次男で、機械や飛行機が好きだった。海軍に憧れていたこともあり、特年兵に志願したという。

生前、自らの口から戦争体験を語ることは、ほとんどなかったという。好江さんは「生きていくうちに、いろいろな話

14歳の戦争参加伝えたい



●特年兵だった羽生勝美さんが軍務時に着用したと思われる作業服を手にする板垣裕さん＝弥彦村
●羽生勝美さんが支給された双眼鏡＝弥彦村



支給品、弥彦の男性が保管

苦難強いた事実後世に

を聞いておけばよかった」と悔やむ。

× × 全国から特年兵に志願した志願したのは、現在の中学生少年たちは戦局の悪化により、現在の中学生少年たちは戦局の悪化により、教育期間が短縮され、戦地に送られた。吉田特任教授は「これだけ若い少年兵は当時、世界に見てもまれな存在だった。忘れ去られている彼らに、戦争の記憶が薄れる中、板垣さんは二つを手元に置いておくよりは、博物館などに寄付することが良いのではと考えている。「若者に苦難を伝える。」「若者に苦難を伝える。」と指摘する。

× × 日本近現代史を研究する一橋大学の吉田裕特任教授(63)は「特年兵はこれまで、あまり注目されてこなかった。記録なども数が少ない」と説明する。特年兵は4期しかなく、当時の陸、海軍が集めた他の少年兵と比べ、とりわけ人数が少ない。戦死者も多かった。羽生さんの作業服と双眼鏡を前に、板垣さんは「伯父さんが、お国のためと特年兵に

んが、お国のためと特年兵に

Fォーカス
@にいがた

海軍特別年少兵 1942年、14歳以上～16歳未満の若者を対象に、旧日本海軍が創設した制度。当時の陸、海軍が募集していた少年兵士の中で最も年齢が低かった。目的は海軍の中堅幹部養成とされ、当初は1年半ほどの教育期間が設けられていた。ただ、次第に教育期間は短縮され、直ちに第一線に配置される方針へと切り替わった。元特年兵らがまとめた資料「海軍特別年少兵」によると、4期で全国から約1万8千人が集まったとされる。このうち実戦を経験した1、2期生の約40%が戦死したという。